

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381064

研究課題名(和文)「感情リテラシー」を育成する保育者の専門性の探究と研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Investigation of "emotional literacy" of ECEC practitioner expertise and in-service-training program development

研究代表者

砂上 史子 (SUNAGAMI, FUMIKO)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：60333704

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、保育者の専門性としての「感情リテラシー」を探究し、それを育成するプログラムの開発を目的として研究を進めてきた。本研究の成果は主に2つ挙げられる。1つ目は、先行研究と保育実践の実態をふまえ保育実践における感情の重要性について、考究した。2つ目は、地域子育て支援における養成校学生及び支援者の困難感を明らかにした。これらの成果は、学会で発表するとともに、議論をさらに深めた。これらの成果は、保育者向けの保育雑誌の特集記事や、保育者対象の研修会にも活かされ、保育実践に寄与した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to explore emotional literacy (emotional intelligence) in ECEC practice and regional child-rearing support and to develop a program to foster emotional literacy. Consistent with prior studies, findings demonstrate the importance of emotional literacy in ECEC and as a condition of practice. The difficulties and coping methods of supporters and guardians involved in regional child-rearing support are clarified. These findings apply to feature articles in specialist journals and in-service training. This study contributes to ECEC practice and regional child-rearing support.

研究分野：保育学

キーワード：幼児教育・保育 地域子育て支援 感情リテラシー 保育者の専門性

1. 研究開始当初の背景

OECD (経済開発協力機構) は、保育・幼児教育の価値を、個人的利益を超えた社会全般にとっての「公共財」とであると指摘し (OECD “Starting Strong”, 2006)、諸外国の縦断研究は、質の高い保育が、他者に対する信頼感や自己調整能力などの非認知的技能を養い、子どもの発達に持続的な肯定的影響を持つことを明らかにしている。一方で、幼少期の不適切な養育や虐待等による感情的傷付きが、その後の精神病理や非行、犯罪の要因となることも指摘されている。感情を陶冶する幼児教育・保育が背負う役割と責任は非常に重大であり、その質の高さを担保する最大の要因は保育者の質である。

我が国の幼稚園教育要領、保育所保育指針は、修了までに育てるべき心情・意欲・態度をねらいとしており、3歳未満児の養護においても情緒の安定を不可欠としている。しかし、子どもの感情を調整し、対する保育者のあるべき対応については、「共感的理解」「カウンセリングマインド」などの概念によってある程度規定されているものの、それらは曖昧さを残している。また、保育者の個人的資質や経験に左右される部分が多いままになっている。したがって、保育者の専門性としての感情に関する専門的知識と技能の同定が必要である。

近年、教育、福祉、医療、臨床等の領域では「感情リテラシー(emotional literacy)」が重視されている。感情リテラシーとは、「自分自身の感情に気づく」「自分の感情を表現する」「感情を適切に調整する」等の能力である。感情リテラシーは、個人のレジリエンスを高め、健全な自己肯定感や対人関係を育むものである。したがって、保育者は、自分自身がこれらの能力を身につけるとともに、子どもに対して彼らが感情リテラシーを身につけられるよう導く「感情コーチ」となることによって、生涯にわたる適応的発達に必要な

不可欠な能力を子どもに育むことができる。以上から、「感情リテラシー」の理論と実践的技法を、保育者の専門性に位置付けることは、幼児教育・保育が担う感情の教育に実証的かつ科学的基盤と、それに裏付けられた知識と技能をもたらすことになる。

2. 研究の目的

保育者による保育者自身と子どもの感情理解、感情調整に関する確かな知識と技能を実証的知識と技能によって位置づけ、明確にする必要性から、本研究を着想した。本研究では、保育者の「感情リテラシー」を育成するためのプログラムの開発を目指し、研究を行う。具体的には、(1) 保育実践における感情の重要性の考究と、(2) 地域子育て支援における支援者の困難感を明らかにする研究を実施する。

3. 研究の方法

研究方法は、以下の通りである。

- (1) 保育実践における感情の重要性の考究では、文献調査に基づき、論考を執筆した。
- (2) 地域子育て支援における支援者の困難感を明らかにする研究では、実習レポートやインタビュー調査を M-GTA を参考に質的に分析した。

4. 研究成果

(1) 保育実践における感情の重要性の考究 「感情労働」としての保育と、感情リテラシー

保育・幼児教育の仕事は、子どもや保護者に対する共感や同僚との葛藤の対処などの多様な感情の経験と仕事がかちがたく結びつき、また保育者としての感情やその表し方に一定の「望ましさ」が求められる。他の対人援助職と同様に保育の仕事もまた「感情労働」(ホックシールド, 2000) を伴う。

保育者の感情労働の特徴には、遊びよりも

食事などの生活にかかわる活動で焦りなどのネガティブな感情を経験しやすいこと、職場の方針と自分の保育観との不一致や同僚との関係において感情をコントロールする大変さを感じるなどがある（諏訪ら，2011）。

「感情リテラシー」とは、EI(情動知能/emotional intelligence)と同様の意味を持つ、感情を自覚したり表したり調整したりすることにかかわる力である。その具体的な内容は、次の～から成る。EIの提唱者サロヴェイとメイヤーの定義から、感情を正確に知覚する能力、特定の感情を促進して思考や行動に活かす能力、感情や感情に関する知識を理解する能力、状況に応じて自他の感情をコントロールする能力。

保育者が感情労働を担いながら、保育者自身がそのストレスを乗り越え、バーンアウトせずに心身ともに健やかに働き続けるためには、保育者個人の「感情リテラシー」を高めることが必要である。保育者に求められる「感情ルール」と自分の正直な感情との両立が、保育者の感情リテラシーの課題であるといえる。

子どもを健やかに育むための保育者の感情リテラシー

現在、乳幼児期の感情的発達がその後の学習に対する前向きな姿勢や、友だちとうまくやっていく力、非行や犯罪の防止につながるなど、乳幼児期の感情リテラシーの獲得の重要性が指摘されている（OECD，2015；池迫・宮本，2015）。子どもの感情リテラシーは、家庭や幼稚園・保育所などでの身近な人とのコミュニケーションの積み重ねによって育まれる。その際に保育者は、「子どもの感情の調整役」と「子どもの感情のモデル」という2つの役割を担う。それらの役割は、どちらも具体的なやりとりにおける保育者自身の感情を伴って実践される。子どもを育てる大人の機嫌、すなわち大人の感情は、子ども

の幸せに大きく影響する。子ども時代に機嫌のよい大人の傍で過ごすことは、子どもの生涯を支える財産となる。

したがって、子どもを守り育てる専門職である保育者には、自分自身の感情が子どもに与える影響についてのより一層の自覚と感情リテラシーという専門性が求められる。

子どもを健やかに育むコミュニケーションの質

家庭や幼稚園・保育所などでの身近な人とのコミュニケーションの積み重ねが、子どもの育ちにつながる。感情の交流も含めて、そのコミュニケーションの質を検討する必要がある。人が生きる基盤となり、人生初期に育むべき基本的信頼感や自己肯定感を重視して、「子どもと健やかに育む相互作用」と「子どもを傷つけ脅かす相互作用」を明らかにしたものが次の表1，2である。

「子どもを健やかに育む相互作用」（表1）では、どのような子どもの姿に対しても、それを責めたり、無視したりせず、子どもの感情や欲求を認め応じて【無条件の愛情】に基づく関りがある。また、その都度子どもの欲求を尊重し、それを満たせるように対応する【温かさ】や【敏感・適切】がある。さらに、子どもの感情や欲求を受け止めつつも、それらに振り回されることなく安定した感情と態度をもたらす【健全な境界】が保たれている。感情面で健全な境界が保たれていることで、養育者・保育者は子どもがネガティブな感情を表出した場合や、子どもが望ましくない行動をした際に毅然と対応しなくてはならない場合でも、子どもの行動や感情に巻き込まれ過ぎたり動揺したりせず、落ち着いて対応することができる。そして、そのような養育者・保育者の感情の安定自体が子どもの感情のコントロールの手本となる。

《表1 子どもを健やかに育む子育て》

	子どもを健やかに育む子育て
環境	【安全・安心】 適切な衣食住、保護
一貫性	【一貫性】 一定の安定した秩序、見通しの持てる生活
柔軟性	【柔軟性】 柔軟性のあるルール、状況に応じた対応
境界	【健全な境界】 自他の感情の区別 独立した個人としての子どもの尊重、世代境界
愛情・承認	【無条件の愛情】 ありのままの存在としての承認
感情・雰囲気	【温かさ】 快の感情や雰囲気(喜び、楽しさ等)が強い 感情の交流がある
応答性	【敏感・適切】 子どものサインに対する適切な理解と応答

一方、「子どもを傷つけ脅かす子育て」(表2)では、子どもの欲求が否定されたり、無視されたりする【冷たさ】や【鈍感・不適切】が見られる。さらに子どもの感情と養育者・保育者の感情との区別が曖昧で、養育者・保育者の不快な感情の原因を子どもに帰すような【境界の混乱】が見られる。このような相互作用は、親の欲求を満たさなければ愛情は得られないという【条件付きの愛情】の感覚を子どもにもたらず。そして、これらの経験が積み重ねられると、子どもは「自分は(親を困らせる)だめな子だ」という罪悪感や自己否定感、「何をしても親にかまってもらえない」という無力感を育むことになる。

《表2 子どもを傷つけ脅かす子育て》

	子どもを傷つけ脅かす子育て
環境	【剥奪・暴力】 適切な衣食住の欠如 身体的・心理的・性的虐待・ネグレクト
一貫性	【予測・制御不能】 危機と緊急事態の連続、約束の不履行
柔軟性	【硬直性】 例外のない独善的ルール、「～べき」思考
境界	【境界の混乱】 自他の感情の区別の曖昧さ 大人と子どもの役割逆転、世代境界の消失
愛情・承認	【条件付きの愛情】 親の欲求を満たすための/満たす限りでの承認
感情・雰囲気	【冷たさ】 負の感情や雰囲気(怒り、悲しみ等)が強い 感情の交流が乏しい
応答性	【鈍感・不適切】 子どものサインへの不適切な応答、無視

離職を防ぐ保育職場のあり方

質の高い保育を行うには、保育者の人材育成とメンタルヘルスの維持が最重要課題である。しかし、保育現場では、保育者の早期離職が喫緊の課題となっている。保育者が抱えるストレスの中でも、保護者対応や同僚・上司との関係によるストレスが大きい(宮下, 2000)。保育者の離職を防ぐためにも、新任・若手保育者を支える園の組織づくりが必要であり、その観点として感情リテラシーの育成と、それによるバーンアウトの防止がある。

新任・若手保育者を支え、育てる出発点は、その混沌とした感情の理解にあるといえる。新任保育者の言いたくても言い出せない気持ちやどう伝えればよいのか分からない気持ちなども考慮し、新任保育者に伝えやすさと見守られている安心感の両方を与える体制の工夫が必要である。また、職員同士のインフォーマルな関わりも重要となる。

(2)地域子育て支援における支援者の困難感を明らかにする研究

「保育者養成課程の地域子育て支援実習における学生の困難感」の研究

本研究では、地域子育て支援実習での保護者理解と保護者へのかかわりにおける、保育者養成課程の大学に通う学生の困難感を明らかにすることを目的とした。具体的には、保育者養成課程4年次学生13名の地域子育て支援実習後のレポートの内容を、M-GTAを参考にしして質的分析を行った。

その結果、学生は、地域子育て支援実習における保護者とのかかわりにおいて、【目標とする地域子育て支援像】を持つ一方で、【実際の子育てへの戸惑いや難しさ】【子育てにかかわる経験の少なさ】【具体的手立ての不足】を感じていることが明らかとなった。すなわち、このことから、学生への指導においては、保護者への言葉がけなど保護者に応じた支援者の具体的援助の詳細に気づけるよ

うにする必要がある。また被支援者としての保護者理解にとどまらず、保護者の肯定的感情にも目を向け、保護者を子育てのパートナーとして意識できるようにする必要がある。

本研究で明らかとなった地域子育て支援実習における学生の困難感の特徴は、地域子育て支援における支援者のキャリア発達の経路に位置づけることができる。学生は地域子育て支援における支援者のキャリア発達における最初の段階にあり、目標とする地域子育て支援像と実際の子育てとのギャップを困難に感じ、手立ても見いだせていない状態にあると考えられる。

「地域子育て支援における支援者の困難感とその対処」の研究

本研究の目的は、地域子育て支援の支援者が感じる困難と対処について、支援者の心理に焦点を当て、その詳細を明らかにすることである。地域子育て支援拠点の支援者6名にインタビューを実施し、M-GTAの手法を用いて分析を行った。

その結果、以下のことが明らかとなった。支援者は、親からの相談や親子間の橋渡しなどの場面で、子育ての多様さや外部機関との連携に課題や困難を感じている。支援者は、より良い支援を目指して「～したい」と思いながら、それができない葛藤に困難を感じている。こうした支援者の思いは、困難な状況の解決に向けた主体的取組みを支える原動力となっている。

さらに本研究で示された支援者の困難感と対処における支援者の心理は、地域子育て支援拠点の支援者に求められる専門性と関連していると考えられる。そこで本研究で見出されたカテゴリーのうち、とくに地域子育て支援における支援者の困難感軽減へつながる取り組みについて、考察から得られた具体的方策への示唆を検討した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

1. 實川慎子・砂上史子 2017 保育者養成課程の地域子育て支援実習における学生の困難感 学生の保護者理解と保護者へのかかわりに注目して 千葉大学教育学部研究紀要, 第65巻 pp.327-334
2. 實川慎子・砂上史子 2016 地域子育て支援における支援者の困難感とその対処 乳幼児教育学研究, 第25巻 pp.35-46 (査読有)
3. 砂上史子 2016 特集: 保育者が育つ、育ち合う職場づくり 職員のメンタルヘルスのために (監修・執筆) 『保育ナビ』2016年12月号(第7巻9号) pp10-21 (うち座談会 14-17, 執筆 12-13, 21)
4. 砂上史子 2016 子どもを健やかに育む「正しい愛情と知識と技術」 『保育通信』, 740号 全国私立保育連盟 pp.6-11
5. 砂上史子 2015 機嫌のよい保育者、機嫌のよい職場をめざして 特集: 今、保育における感情リテラシーを考える 職員が「辞めない 職場、”育つ 職場とは(監修・執筆) 『保育ナビ』2015年3月号(第5巻第12号) フレーベル館 pp12-25 (うち鼎談 14-19, 執筆 pp.20-21, 24-25)
6. 砂上史子 2014 保育における人間関係(2)—子どもを健やかに育むコミュニケーションの質— 『キリスト教保育』, 2014年11月号(第548号) 日本キリスト教保育連盟 pp.38-40
7. 砂上史子 2014 保育における人間関係(1)—感情リテラシーの重要性— 『キリスト教保育』, 2014年10月号(第547号) 日本キリスト教保育連盟 pp.38-40

〔学会発表〕(計6件)

1. 實川慎子 2016年11月26日 話題提供: 地域子育て支援における支援者及び保育者養成の学生の困難感 自主シンポジウム「保護者支援における実践者の感情リテラシー

保育者養成校・幼稚園・保育所での取り組みと課題」實川慎子（企画・司会・話題提供）・砂上史子（企画・指定討論）・原田理恵（話題提供）・衛藤真規（話題提供）・松井剛太（指定討論）日本乳幼児教育学会第 26 回大会（神戸女子大学・神戸女子短期大学：神戸市）

2. 砂上史子 2016 年 11 月 26 日 指定討論：保護者支援における保育者の感情リテラシーの育成 保育者養成校・幼稚園・保育所での取り組みと課題 自主シンポジウム「保護者支援における実践者の感情リテラシー

保育者養成校・幼稚園・保育所での取り組みと課題」實川慎子（企画・司会・話題提供）・砂上史子（企画・指定討論）・原田理恵（話題提供）・衛藤真規（話題提供）・松井剛太（指定討論）日本乳幼児教育学会第 26 回大会（神戸女子大学・神戸女子短期大学：神戸市）

3. 實川慎子 2016 年 5 月 7 日 ポスター発表：地域子育て支援実習における学生の困難感 日本保育学会第 69 回大会（東京学芸大学：東京都小金井市）

4. 實川慎子・砂上史子 2015 年 11 月 29 日 口頭発表：地域子育て支援における保育者の困難とその対処—保育者の感情に焦点を当てて— 日本乳幼児教育学会第 25 回大会（昭和女子大学：東京都世田谷区）

5. 砂上史子 2015 年 5 月 10 日 指定討論：保育・幼児教育における遊びと保育者の感情 自主シンポジウム「保育における感情労働と養成校の課題 子どもの主体的な遊びにかかわる力を育む保育者養成とは」高橋真由美（企画者・話題提供者）・諏訪きぬ（企画者）・戸田有一（司会者）・小川房子（話題提供者）・前田武司（話題提供者）・砂上史子（指定討論者）日本保育学会第 68 回大会（椋山女学園大学：名古屋市）

6. 砂上史子 2015 年 3 月 20 日 話題提供：『かいじゅうたちのいるところ』をめぐる冒

険を支える保育・幼児教育 自主シンポジウム「子どもと養育者の感情にかかわる支援」砂上史子（企画・司会・話題提供者）・安藤智子（話題提供者）・中野茂（話題提供者）・野坂祐子（話題提供者）・遠藤利彦（指定討論者）日本発達心理学会第 26 回大会（東京大学：東京都文京区）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

砂上史子 (SUNAGAMI, Fumiko)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：60333704

(2) 研究分担者

實川慎子 (JITSUKAWA, Noriko)

植草学園大学・発達教育学部・講師

研究者番号：80619776